

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(12) : タテ系の張力と織機の型式2 : 足機

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	281
ページ	55-57
発行年	2004-08-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5224

無縦横

タテとヨコの 色とかたち のフィールドワーク

吉本 忍

タテ糸の張力と織機の型式?

足機

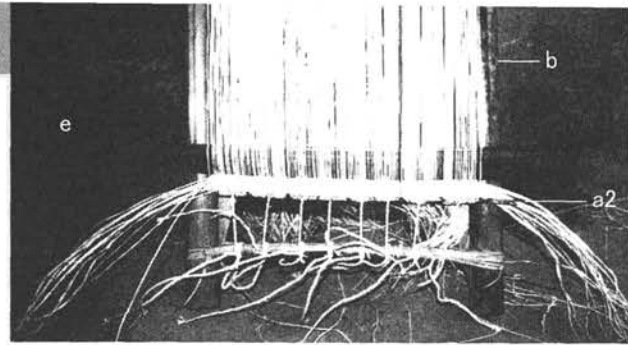


写真2 メッタ人の織機（部分）（カメルーン、クボメ：2000年）a2-タテ糸保持棒、b-タテ糸間保持具（木枠）、e-緯打具

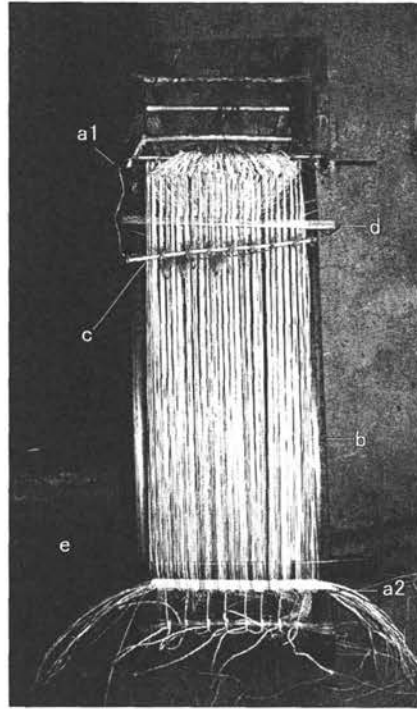


写真1 メッタ人の織機（カメルーン、クボメ：2000年）a1～a2-タテ糸保持棒、b-タテ糸間保持具（木枠）、c-綜統、d-開口保持具（中筒）、e-緯打具

足でタテ糸に張力をかける機

足機は、足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の織機である。わたしが、手機、足機、腰機、地機、枠機、錘り機という6種類の織機とフィールドワークの現場で出会ったのは、腰機、枠機（高機）、地機、手機、錘り機、足機の順であった。また、これらの織機型式ごとにおこなった最初の調査は、腰機が1970年のインドネシア（ティモール島ニキニキ）、枠機（高機）が1972年のインドネシア（スマトラ島パンダイ・シケツ）、地機が1979年のインド（オリッサ州ムドゥリパダ）、手機が1987年の日本（八丈島）、錘り機が1994年のノルウェー（マ

ンダレン）、足機が2000年のカメルーン（クボメ）であった。したがって、最後の足機については、1970年にインドネシアのティモール島で調査をはじめたから、30年目にしてようやく出あった織機型式ということになる。

とはいっても、2000年にアフリカのカメルーンで調査した足機は、さきに6月号（279号）でも述べているように、織りはじめの段階においてのみ足機として位置づけられるものであり、典型的な足機とはいえないものであった。

カメルーンの足機

2000年のカメルーンでの足機の調査は、機織り技術の映像取材と織機や染織品などの標本資料の収集をもなった国立民族学博物館のプロジェクトの一環としておこなったもので、カメルーン以外では、セネガル、トーゴ、コンゴ共和国、ケニアなどの国々でも調査と映像取材と収集をおこなってきた。ただし、織りはじめから織り終わりまで、一貫して足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の足機が、コンゴ民主共和国（旧ザイール）

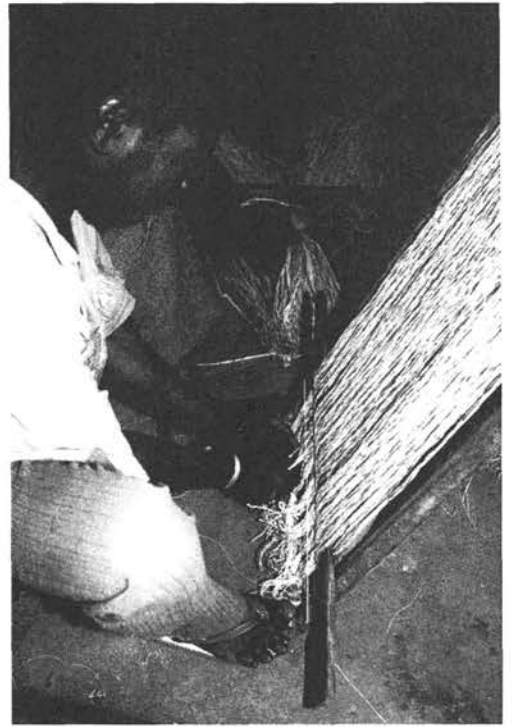
で20世紀のはじめころまで使用されていたことから、このプロジェクトの計画段階では、できればコンゴ民主共和国にも行きたいと考えていた。しかし、この国は長年にわたって内戦が続いていることから、それは望むべくもないことであり、足機の調査と映像取材と標本資料収集はカメルーンのみメッタ（Metta）人のもとでおこなった。

メッタ人は、メグアモ（Meghamoh）人の支族とされる人々で、カメルーンの北西部州の町、ベングイの東方2キロのクボメ村でおこなった。この村ではメッタ人の男たちが、ラファイアを糸素材とした平織組織の無地織物やタテ縞織物を織っており、織りあがった布は、おもに肩にかける袋（ムバメ/mbame）、すなわちシヨルダーバッグとしてもちいられている。かれらが使っている織機は、一見したところ長方形の木枠を使用していることから枠機と見られがちである。しかし、実際に枠機として使用されているのは、織り途中からであり、織りはじめの段階では足機として機能している。

織りはじめに足機として機能していた織機が、織り途中から枠機として機能するという変則的な織機は、タテ糸への張力のかけ方が変化することによるものである。どうしてそうなるのかということは、あとで説明することとして、まずはこの織機にかけわたされたタテ糸の整経方式、および、足機として機能している段階と、枠機として機能している段階の構造について紹介しておくこととする。

この織機にかけわたされたタテ糸の整経方式は平整経式である。また、織機の構成部品としては、タテ糸保持棒、タテ糸間保持具（木枠）、綜統、開口保持棒（中筒）、緯打具

写真3 足機として機能している織りはじめの機織り
(カメルーン、クボメ：2000年)



があり(写真1・2)、そのほかに織り手が腰をかける椅子がある。なお、この機織りには緯入具はなく、ヨコ糸は手でタテ糸のあいだに通されていた。

タテ糸保持棒としては2本の細い棒が使用されており、タテ糸は2本のタテ糸保持棒に8の字状にかけわたされている。タテ糸間接保持具としては木枠がもちいられている。これは2本のタテ糸保持棒の一方、もしくは両方を紐でくくって固定しておくための部品であり、外形は縦長の長方形を呈している。綜統は綜統棒とラフィアを糸素材とした綜統糸で構成されている。タテ糸をラセン状にすくい取った綜統糸は、8つに分けられており、それぞれは束ねられて綜統棒にくくられている。こうした織機を使用したメッタ人の機織りは、織機を壁に立てかけておこなわれる。その織りはじめでは、タテ糸保持棒の2本の棒のうちの1本は、両端を木枠の上部にくくって固定されているが、タテ糸の下端に通っているもう1本の棒は固定されておらず、織り手はタテ糸保持棒の両端をサンダル履きの左



写真4 枠機として機能している織り途中の機織り
(カメルーン、クボメ：2000年)

右の足先で押し下げ、タテ糸に張力を付与した状態で機織りをおこなっていた(写真3)。そして、およそ5センチあまり織り進むと、タテ糸保持棒はあらかじめ木枠底部の横木につないでおいた紐をきつく締めて固定される。そしてその後には、このタテ糸保持棒は織りおわりまで木枠に固定したままの状態で機織りがおこなわれる(写真4)。

このようなメッタ人の機織りは、タテ糸保持棒の両端を織り手の左右の足先で押し下げた状態で機織りをおこなっている。あるいは足機として機能しており、タテ糸の張力が必要に応じて織り手が足先を動かすことにより加減される。さらに、その後にはタテ糸の下端に通っているタテ糸保持棒が木枠に固定された状態で機織りがおこなわれている。あるいは枠機として機能しており、このばあいのタテ糸の張力は常に一定している。そして、このようにメッタ人の機織り型式が織り途中で足機から枠機へと変化することについては、織り手たちは、織りはじめの段階ではタテ糸の状態が安定していないことから、足を動かすことでタ

テ糸の張力を加減する必要があるとしている。なお、カメルーンでメッタ人の近隣に住んでいるティカール人の機織りは、現在は枠機を使用しているが、古くにはメッタ人のばあいと同じように織りはじめの段階では、タテ糸保持棒を足で押し下げてタテ糸に張力を付与していたと伝えられており、足機として機能していたことがあきらかとなっている。

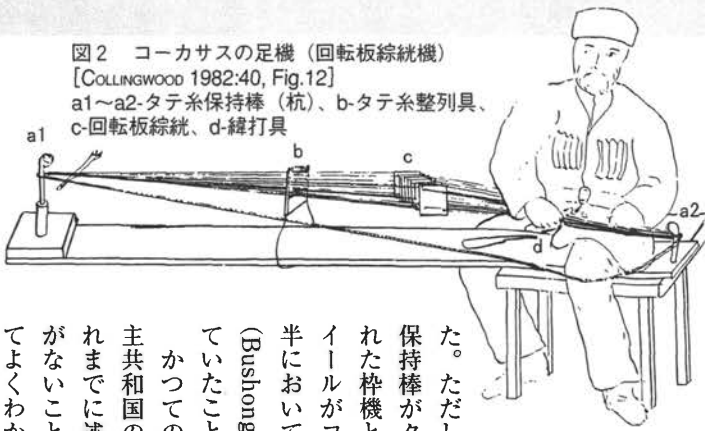
ザイルの足機

織りはじめから織りおわりまで、足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の足機は、1910年代ごろまでザイル(現在のコンゴ民主共和国)の北西部に居住するセンゲレ(Sengere)人、トゥムバ(Tumba)人、サカタ(Sakata)人、ジア(Jia)人などの民族集団のあいだで使用されていた。かれらのあいだで使われていた足機の構成部品としては、タテ糸保持棒、タテ糸間接保持棒、綜統、開口保持棒(中筒)、緯打具、背もたれなどがある。このうち、とくにタテ糸間接保持棒のひとつには、タテ糸に張力をもたせるために両足をかける棒があり、この棒はタテ糸保持棒に紐でつながれている。また、こうした足機の織機構造は、2本のタテ糸保持棒に平整経式の整経方式で張りわたされたタテ糸が織り手の側に急傾斜した特異な構造を見せており、機織りは織り手がタテ糸の下にあお向けになったような姿勢でおこなわれていた(写真5・図1)。ザイルで1910年代ごろまで使われていたこのような足機が、今日のコンゴ民主共和国においても使い続けられているのか否かについてはあきらかでないが、1910年代にザイルの南部では、ソンゲ(Songe)人、ンクッシュ(Nkushu)人、ム

図2 コーカサスの足機 (回転板綜統機)

[COLLINGWOOD 1982:40, Fig.12]

a1~a2-タテ糸保持棒 (杭)、b-タテ糸整列具、
c-回転板綜統、d-緯打具



た。ただし、これらの織機はいずれもタテ糸保持棒がタテ糸間接保持具 (木枠) に固定された枠機として機能していたものであり、ザイルがコンゴ民主共和国となった20世紀後半においても、北西部に居住するブショング (Bushong) 人のもとで同様の枠機を使用していたことがあきらかになっている。

かつてのザイル、そして現在のコンゴ民主共和国の織機や機織り技術については、これまで述べてきたこと以外にほとんど情報がないことから、その詳細については今もってよくわからないことが多い。しかし、ザイ

ブン (Mbun) 人、ペンデ (Pende) 人、ルバ (Luba) 人、レガ (Rega) 人などの民族集団のあいだにおいて、前記の足機と同様にタテ糸が織り手の側と急傾斜した織機が使用されていた。



写真5 旧ザイルにおけるセンゲレ人の足機による機織り
[Picton 1979:92, Fig.90] (J.Maes撮影:1913年)

イルの北西部において足機が存在し、南部には類似した構造の枠機が存在していたことや、同様の枠機が20世紀後半にコンゴ民主共和国の北西部で使用されていること、さらにはカメルーンに機織り途中で織機型式が足機から枠機に移行する織機が存在しているということなどから、わたしは、かつてアフリカの中央部には、足機によって織物を織るといふ世界の他の地域においては類例を見ない足機文化圏が存在していたと推察している。そして、1910年代にザイル南部に住むソンゲ人、ンクツシユ人、ムブン人、ペンデ人、ルバ人、レガ人のもとで使用されていた枠機や、20世紀後半にコンゴ民主共和国の北西部に住むブショング人のもとで使われていたタテ糸が織り手の側と急傾斜した枠機は、いずれも1910年代に、センゲレ人、トゥムバ人、サカタ人、ジア人などの民族集団のあ

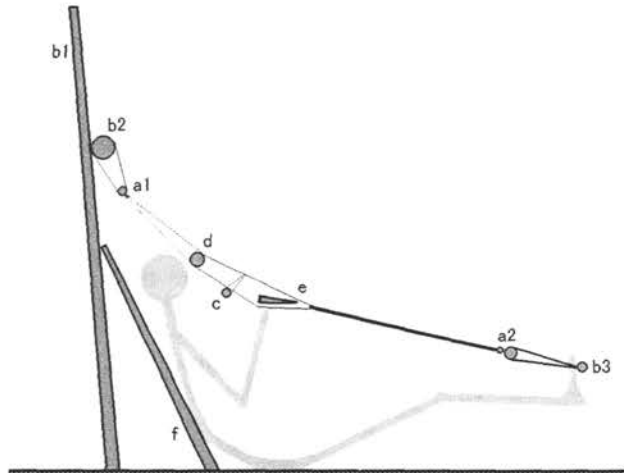


図1 写真5の足機の構造 (想定図) a1~a2-タテ糸保持棒、b1-タテ糸間接保持具 (杭)、b2~b3-タテ糸間接保持棒、c-綜統、d-開口保持棒 (中筒)、e-緯打具、f-背もたれ

いだで使用されていたような足機から移行した織機型式であったと考えている。

なお、足機は、これまでに紹介してきたザイルやカメルーンのほかに、コーカサス地方においても見いだされる。それは昨年の10月号(27号)に執筆した「結節輪状の織物」のなかで、コーカサスの回転板綜統機として紹介した織機であり、この織機では、整経方式が結節輪状整経式のタテ糸、あるいはタテ糸に結ばれた紐に、織り手が足の膝をかけて張力を加減しながら細幅の織物が織られている(図2)。

お詫び

6月号(29号)の「タテ糸の張力と織機の型式」では、足機に関係する文中の民族名、および写真キャプションの民族名と地名に誤りがありました。左記のとおり修正するとともに、お詫びします。

54頁「③足機による機織り」の文中にある民族名「ブショング」は「センゲレ」に、また「ティカール人」は「メック人」に修正します。また、写真3のキャプションの「バメツシグ」は「クボメ」に修正します。

(国立民族学博物館民族文化研究部教授)

よしもと・しのぶ

文献

COLLINGWOOD, P.

1982 *The Techniques of Tablet Weaving*. New York: Watson-Guptill Publications.

PICTON, JOHN & MACK JOHN

1979 *African Textiles*. British Museum Publications Ltd.

SCHAEDLER, KARL-FERDINAND

1987 *Le Tissage en Afrique au sud du Sahara*. Panyerra-Verlag, Munchen.

渡辺公三・福田明男

2000 「アフリカのアップリケと草ビロード」アフリカデザイン」里文出版。